



Title	英会話タスクでの自己開始他者修復連鎖における学生の電子辞書使用
Author(s)	岡田, 悠佑
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2015, 2014, p. 21-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54363
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

英会話タスクでの自己開始他者修復連鎖における学生の電子辞書使用

岡田悠佑

1. はじめに

年間約 200 万台前後の電子辞書が 2000 年以降毎年売れ続けている(JBMIA, 2013)日本では、電子辞書は多くの学習者の間で外国語授業に持ち込む日常的道具の一つとなっていると言える。学習者への電子辞書の普及は、例えば彼らがリーディング課題やライティング課題をこなす際にどのように電子辞書を使用しているのか、また電子辞書の使用が彼らの語彙学習にどのような影響を与えているのかという外国語学習者の電子辞書使用の研究へとつながっている(例: Kobayashi, 2007, 2008; Koyama & Takeuchi, 2004)。しかし学習者の電子辞書使用研究は質問紙やインタビュー調査によるものがほとんどであり、実際の学習者の電子辞書使用場面を分析したものはごく少ない。筆者の知る限り、そういった研究は、学習者同士の対面での英語会話での電子辞書使用を調べた Barrow (2010)と多人数及び対面での学習者間の英語ディスカッションでの電子辞書使用を調べた Hauser (2014)の二件の会話分析研究のみである。

Barrow (2010)は対面の対面での学習者間の英語会話において、話し手が語彙産出に問題を抱えた場合、話し手と聞き手である学習者達はどのように電子辞書の使用を開始し、どのように使用を終えるのかについて特定の行為連鎖があることを明らかにした。産出できない言葉の前で間をおく、出てこない言葉につながる直前の言葉の発音を伸ばす、"uh"などの非語彙表現を用いる、視線を横に移すなどの語彙探索の前振りとしての行為が行われた後で、学習者が自分でその問題を修復するため(つまり、産出できない語を産出するために)電子辞書が使用されることが多い、ということである。そしてそういった話し手のターンの構築(発話)途中での語彙探索のための電子辞書使用は聞き手から問題視されることはなく、むしろ聞き手も自分の電子辞書を使用して話し手の探している語の発見に協力しようとするなど、こういった語彙探索連鎖における問題修復(即ち、特定の語彙の発見)のための電子辞書使用はあらゆる学習者間の会話においても規範的なものであると Barrow (2010)は結論付けている。

しかし、多人数及び対面の対面での学習者間の英語ディスカッションでの学習者による電子辞書使用の分析から、Hauser (2014)は Barrow (2010)の主張に疑問を呈している。話し手がターンの構築途中で電子辞書を使用した際に聞き手が冗談とはいえ"cheating"といった言葉を投げかけた事例があること、そして話し手が自分で出て来ない語彙を探索するために電子辞書を使用する時のみ手に持ちスクリーンを開き、使用が終われば電子辞書のスクリーンを閉じて元の位置に戻すという行為から、Hauser (2014)は電子辞書の使用が聞き手だけではなく話し手自身にとっても英語ディスカッションという相互行為のあるべき状態、規範からは逸脱したものとして志向されることもあるとしている。その上で、Hauser (2014)は、相互行為の上流部分で出てきた日本語の語彙とその英語の対照語をトピック化するため、聞き手が話し手の発話にある語彙を問題として捉えた上で解決まで行う他者開始他者修復を行うため、話し手が自分のターン構築途中での語彙の産出問題を自分で提示し聞き手が解決する自己開始他者修復を行うため、話し手が聞き手の彼・彼女(話し手)の発話の理解の誤りを修復するという話し手-聞き手-話し手という行為連鎖の第三位置での自己開始自己修復のため、と様々な行為を成すために学習者が電子辞書を使用する

ことを明らかにしている。さらに電子辞書は学習者が調べている語彙が何であるのかという関連情報のみをそのスクリーンに示す事ができるため、参加者間で電子辞書のスクリーンを見る・見せるといった動きを通じて問題となった語彙の認識が促進されること、学習者の辞書の操作に伴う身体の動きが他の学習者の視線を集めるなどして相互行為の展開に影響を与えることなどを発見している。英語学習者の英語ディスカッションにおける様々な電子辞書使用を詳細に記述することで Hauser (2014)は、机や椅子の配置といった環境をどのように整えるかが学習者の電子辞書使用に影響を与えているとしている。

上記二件の英語学習者間の英会話タスクにおける電子辞書研究は学習者の電子辞書使用にまつわる行為連鎖の特徴について述べているものの、電子辞書の特定の使用方法によって学習者がその相互行為の中で何を成しているのかということに関しては、電子辞書の使用が語彙の共有化を促し学習機会を協働構築しているということ以外には触れていない。電子辞書を使用する主要場面である語彙探索連鎖はいわゆる修復連鎖の一つのパターンである。修復連鎖全般では対人関係を傷つけないために特定の修復行為が選好される(Schegloff, Jefferson & Sacks, 1977)が、そういった対人関係維持の試みは学習者の電子辞書使用場面において成されるのであろうか。

相互行為とはどのようなものであれ人と人との間で行われる社会的行為であり、参加者間の対人関係維持は1つの規範として参加者の相互行為方法と相互反映的關係を持つとされている(Heritage, 2008)。そこで本稿は、学習者間の英会話タスクにおいて参加者である学習者達が電子辞書を使用する際、対人関係維持の試みとしてどのようにして電子辞書を用いるのかを行うのかを明らかにし、どのような取組が英会話タスクにおける学習者の有効な電子辞書に使用つながるかを議論することを目的とする。より具体的には、本稿は語彙探索連鎖の中でも自己開始他者修復、つまり話し手が特定の語彙産出に困難があることを自ら明かし、それを話し手以外の参加者が提供することで語彙探索が終了する連鎖においてどのように電子辞書が用いられるかを分析し、その電子辞書使用法が学習者間の対人関係をどのようにして維持するのかを解き明かす。その結果から、電子辞書の使用が英会話タスクでの学習を促すために教師はどのような指示をすべきか、そしてどのように座席位置をレイアウトすべきかを議論する。以下では、相互行為における語彙探索連鎖における修復について概観した上で、本研究に用いるデータ及び研究方法である会話分析を説明し、そして実際のデータ分析を行う。

2. 語彙探索連鎖における修復

語彙探索連鎖とは語形の問題(例えば、形容詞形の"necessary"なのか副詞形の"necessarily"なのか、"read"の発音は[ri:d]なのか[red]のかなど)を含んだ特定の語彙の産出の問題とその問題の提示、そして実際の問題修復に伴う行為の連鎖である。次の抜粋は語彙探索連鎖の一例である。

抜粋 1 ((E=Ethan)¹)

1 E: that's my (.3) uh: (.6) my: (.9) major.

ここでは、E が所有代名詞"my"に続く語の産出に問題があることを複数の資源を用いて示している。沈黙("(3), (.6), (.9)"), 非言語表現である"uh:"、そして引き伸ばされた発話("uh:"及び"my:")

¹抜粋における記号については附録文字化記号一覧を参照のこと。

は、話し手が語彙を探していることを示す典型的なものである。この抜粋では問題提示の後、Eは"major"という語を提供し自分で問題を解決している。つまり、話し手であるEが自分で語彙の産出を問題として提示(開始)し、その問題を自分で修復している。一方、次の抜粋では問題の提示と修復がそれぞれ別の参加者によって行われている。

抜粋2 (E=Ethan, S1=Student 1, S2=Student 2, Y=Yusuke(researcher/author))

- 1 E: this time I was very happy with you.
2 (.3)
3 E: uh: especially I ↑like your uh: uh (.5) enthusiasm?
4 (.9)
5 S1: enthu-?
6 S2: en?
7 (.8)
8 E: uh Yusuke how do you say enthusiasm in Japanese
9 (1.4)
10 Y: nesshinsa.
11 (.5)
12 E: nesshinsa?
13 Y: mm hm.
14 E: yeah.

これは抜粋1と同じ参加者で英語母語話者であるEが、彼が教師を務める大学での英語授業で教室内会話テストを受けたばかりの学生二人に対してフィードバックをしている場面であり、筆者も研究者としてその場に参加し教師と学生のやり取りを見ている。Eは1で学生に対して肯定的評価を述べた後、3でも続けて"I↑like your"と新たな肯定的評価を行おうとしている。しかし所有格"your"に続く、発話の引き伸ばし("uh:")そして沈黙は、彼が"your"の後に来る発話の産出に問題を抱えていることを示している。ここでは"enthusiasm?"と続く語を産出し問題を自分で修復しているものの、上がり調子で発話されており、聞き手である学生達はその語を認識できるか不確かなことを示している (Sacks & Schegloff, 1979)。学生達は5及び6でそれぞれ"enthu-?"、"en?"とEの発話の一部だけを上がり調子に繰り返すことでEの発話を認識していないこと、つまり理解もしくは聞き取りに問題があることを示し、それを受けてEは8でYに"enthusiasm"を日本語で何とか尋ね、学生達が"enthusiasm"という英語語彙を知らないと解釈したことを示す。ここでEは"enthusiasm"という英語と同義となる日本語語彙を知らないこと、即ちその日本語語彙の算出に問題があることを自ら示し、その問題への修復を他者であるYに任せている。Yは10で"nessinsa"(熱心さ)と同義となる日本語語彙を提供し、Eはそれを上がり調子に繰り返すことで彼の聞き取りの確かさを尋ねる。それにYが"mm hm."と確認を与え、最後にEが"yeah."という発話を産み出すことで、彼がYから提供された語彙を受領したこと、問題が修復されたことを示している。

上記の例が示すように、沈黙や非言語表現の"uh"、問題となる語の直前の語彙の発話の引き伸ばし、そして明示的に他の参加者への探索している語彙を尋ねることを通して話し手による語彙探索連鎖が始まった時、話し手及び他の参加者が従事していた元々の相互行為の流れは一旦停止され、問題の語彙の探索が参加者達の当面の課題となる。そうして始まった語彙探索連鎖は語を探している参加者が受け入れられる語彙が見つかった時点で終了する。語を探している参加者が自分で納得できる語彙を産出できた場合にはその時点で語彙探索連鎖は解消されるが、他の参加者が問題の解決となる語彙を提供した場合には、抜粋2でのEの"yeah."(14)のように語彙を探し

ている参加者がそれを受け入れることによって語彙探索連鎖は閉じられる。

参加者間の対人関係の側面から重要なことは、話し手の語彙産出問題を聞き手が修復した場合、聞き手は話し手よりもその語彙に関する限り知識が上の立場となり、聞き手は知識が下の立場となるということである。抜粋2では話し手であるEが聞き手であるYに"how do you say enthusiasm in Japanese"と尋ねることで自身の語彙産出(enthusiasmに相当する日本語語彙の産出)に問題があること、そしてその問題の修復を依頼し、E自ら当該知識に関して自身が下でYが上であるという「知識上のスタンス」(Heritage, 2012a, 2012b)を提示し、Yも"nesshinsa"とそれに答えることで、その知識上のスタンスを踏襲している。話し手と聞き手との間で知識上の不均衡が築かれた場合、良好な対人関係維持を脅かす可能性があるため、修復連鎖においては規範として、話し手自身が問題を提示し修復を開始すること(自己開始修復)、そして話し手自身が修復を行うこと(自己修復)が選好され、聞き手が話し手の発話に問題があることを提示すること(他者開始修復)、ましてや聞き手が話し手の問題を修復すること(他者修復)は選好されない(Schegloff, Jefferson & Sacks, 1977)。抜粋2のように話し手が聞き手に問題を提示しその修復を行ってもらう自己開始他者修復の事例は規範の例外ではなく、むしろ話し手の方から非選好行為への許可を出すということによって聞き手が規範から逸脱出来るように仕向けていること自体が、話し手が上記規範の存在に志向していることを示しているのである。

抜粋2の場合、YはEがかつて指導した大学院生であり、Yの英語力と日本語母語話者であることをEは知っていた。Yが求められた修復を行った後、Eは聞き取りの確認は行ったものの、提供された語彙自体について疑問を呈することも抵抗することもなく、14の"yeah."にてその語彙を受領し語彙探索連鎖を終了させている。だが、こういった修復の依頼がほとんど同じ英語レベルで授業内外でも顔を合わせる機会の多い学習者間で行われた場合はどうなるだろうか。本稿では次に説明するデータの内、英語授業での学習者間の英会話タスクにおいて語彙問題の自己開始他者修復が行われた事例の詳細な分析から、学習者間の対人関係維持に志向した電子辞書使用手続きを明らかにする。

3. 研究データ及び研究手法

本研究に用いるデータコーパスは日本の私立大学の理系学部でのスピーキングとリスニングに特化した中級レベルの英語授業での英語ディスカッション場面と同じ大学の農学系学部での専門学問のための英語授業での英語ディスカッション場面である。前者は合計4授業分、後者は5授業分(1授業時間はそれぞれ90分)をビデオ録画したものから成っている。教師はどちらの授業も同じ日本語母語話者が務めていた。電子辞書については受講生達はディスカッションの際に使用許可を与えられているだけで特定の電子辞書使用法が指導されたことは無かった。どちらの授業でも、参加者である受講生は授業のみで顔を合わせる訳ではなく、同じ学部の同じ学科に所属しており、授業外でも顔を合わせることの多い関係であった。

本研究が採用する研究手法である会話分析は、「人々が意味の創造及び解釈、組織化に用いることの出来る資源またそれらを制限するものを明らかにする」(Bilmes, 2014, p.68, 筆者訳)ことを目的としたものである。より具体的には、会話分析は会話参加者としての人々の発話や非言語行動を含む一つひとつの振舞いが成す行為としての意味を、会話の流れという文脈、特に前後の振舞いとの関係という内部構造から解き明かしていくことで、資源として人々が有している社会文化的規範を詳細に記述し説明していく。分析を披露する文字化資料は決して一次資料ではないもの

の、分析過程を読者が著者と同様に辿れるように会話分析の標準的文字化手法によって詳細に書き起こされているものであり(附録参照)、分析の妥当性と信頼性を担保する手段の一つとなっている(Seedhouse, 2005)。

4. 分析及び考察

ここでは日本の私立大学の理系学部でのスピーキングとリスニングに特化した英語授業での英語ディスカッション場面から、自己開始他者修復と見なされる語彙探索連鎖の事例を一つ取り上げ、詳細な分析を行う。この英語ディスカッションは、学生達が四人一組でグループを作り、授業当日に教師が告げるディスカッショントピックに対してそれぞれが賛成か反対かの意見を述べ、6分間議論をしていくというものである。一つの授業内で複数のトピックが授業開始時に提示され、それを順番に学生達は自分達で特に親しいクラスメイト四人でグループを組み議論を行っていた。これは同じ四人一組の形式で行われるグループ会話テストへの練習として行われており、今回を含む練習では電子辞書の使用は許可されていた。またどのように席を配置するのかは学生に任されていた。今回取り上げる以下の抜粋(抜粋3)では、図1の通り学生A、B、C、Dが長机に一直線に並んで座り、"It is a good thing to live in a modern city"というトピックに対して賛成か反対か、立場を示して議論を行っていた。



図1. 抜粋3参加学生.

抜粋3より前の部分では、A、B、Cがそれぞれトピックに対して理由を挙げて賛成すると述べたのに対しDは自分は反対だと伝え、その理由として"Modern city is not beautiful. There are a lot of buildings. I love flowers."と述べていた。その後、彼女が" So, I don't like modern city."と言ったことに、BとCが"ah:"という発話で了解を示したことに続いて抜粋3でのやり取りが行われる。

抜粋3

118 D: I want to: live (.6) in[:
 119 [(B shifts her gaze from
 120 her E-Dictionary to D))
 121 (3.3)/[(D looks aside))
 122 [(B glances at her ED; then she
 123 looks at D while closing her ED))
 124 C: huhuh
 125 B: ↑ah: [o↓ka:y./((looks at D and nods))

126 (.7)/((D still looks aside))
 127 D: ((coughs))
 128 C: huhuh
 129 (1.7)/((D shifts her gaze to C))
 130 D: °inaka tte°
 131 C: inaka/((looks at B)) tte nan da kke?
 132 B: ah:.
 133 (.6)/((B looks upward; then she looks at & opens
 134 her ED; she then types on it))
 135 B: haha/((still types on her ED))
 136 D: huhu[huh
 137 C: [huhuh
 138 B: ah:. ((shows her e-dictionary screen to C))
 139 C: [((looks at B's ED screen))
 140 D: [((looks at B's ED screen)) ah.
 141 C: country da.
 142 B: cou[ntry?/((looks at D))
 143 D: [ah oh [country./((looks at B while pointing her hand to B's ED))
 144 C: [country. [huhu[huh
 145 A: [((nods))
 146 B: [ah [okay.
 147 D: [coun-
 148 coun[try.
 149 C: [h:m.
 150 D: country is. (.9) h:m (1.7) flower ()

118 での D のターンでは発話の引き伸ばし("to:", "in: ")及び沈黙が起り、前置詞"in"の目的語となる語彙の産出に問題があることが示されている。121 での 3.3 秒の沈黙の間には D は何か考えているような表情で顔を横に向け、語彙の産出に問題があることをさらに示している。この間、聞き手の一人である B は彼女の電子辞書(文字化資料での ED: Electronic Dictionary)のスクリーンを見ていたが、それを閉じて D を見る。C は沈黙の後の 124 で笑い、何か D が問題を抱えていること、そのことによる沈黙を笑えるものとして捉えたことを示す。125 で B はターンを取り、"ah: okay"と認識変更標識("ah:": Heritage, 1984; Ikeda, 2007)と第三位置での連鎖終了発話("okay": Schegloff, 2007)を、D の方を向いて頷くという非言語行為と共に行うことで、何かを了解したこと、そのことにより相互行為を次へと進めようとすることを示す(okay の役割については Beach, 1993 も参照)。しかしその後の 126 では D はまだ横を向いたままであり、語彙産出の問題がまだ修復されず語彙探索連鎖が終わっていないことを示唆している。D はその後 127 で咳払いをし、C は笑う(128)。129 での沈黙の間に、D は視線を C に向け、その直後 C に小さな声で"inaka tte"と日本語に切り替え、明示的に探している語彙とその修復を C に尋ねる(130)。C はしかし即座に B の方を向き、B に"inaka tte nan da kke"とさらに尋ねる(131)。つまり、ここでは D から C へ、C から B へと、D の語彙探索の修復が依頼されているのである。

この状況で B は"ah:"と D が何を探しているのかという問題もしくは自分に課せられたタスク、あるいはその両者を理解したことを示し(132)、自分の電子辞書を開いてキーを打ち込むことで D が探している語彙の修復に動く(133-134)。135 での B の電子辞書に打ち込みながらの"haha"という笑いは D と C の笑いにつながる。138 で B は認識変更標識である"ah:."を発した後、彼女の電子辞書の画面を C に見せることで(図 2)、問題となっている"inaka"の英語での同義語を探し当てたことを示す。C と D は即座に B の電子辞書の画面を覗き込み、D は"ah:"によって理解を示す(140)。

Cは"country da."と問題の語彙を見つけたことを示し(141)、BはDに問題の語彙は"country?"なのか尋ねる(142)が、その発話途中でDは"ah oh country."という発話を、Bを見ながら彼女の電子辞書を指さし(143)、確認を行う(図3)。CはDと同時に"country"と繰り返し、ちょうど発話が重なったことに対して笑い合う。この語彙探索に直接参加していなかったAも頷き(145)、Bも"ah okay"という発話でDの確認を了解したこと、そのことにより相互行為を次へと進めようとすることを示す。Dは147-148で再度"coun- country."と繰り返すが、これは語彙探索により中断していた118でのターン構築に必要な要素、"I want to live in"のinの目的語の追加により、彼女の元々のターンの構築をここで終了していると考えられる。実際に彼女はその後150で"country is. (.9) h:m flower ()"と、新たなトピックを新たなターンを構築している。

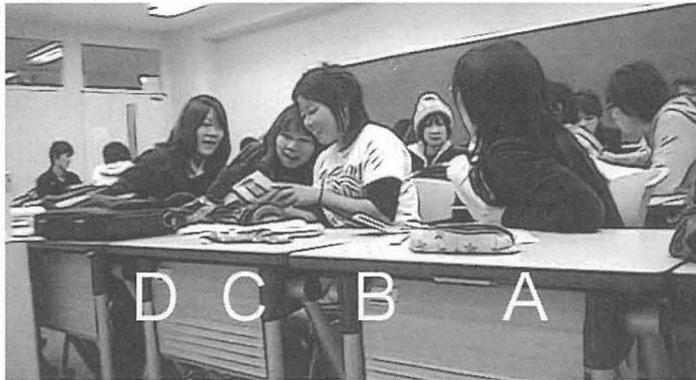


図2. 139-140での学生達の振舞い。

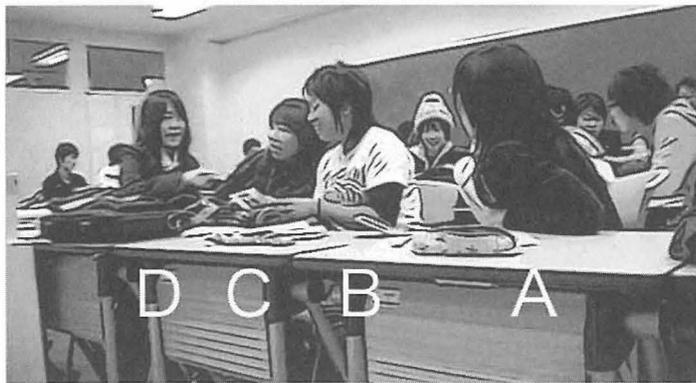


図3. 143での学生達の振舞い。

上記の通り、Dが自己開始した語彙探索連鎖は、DがCにそしてCがBに修復を尋ね、Bが彼女の電子辞書で問題の語彙を調べ、Bが電子辞書でその語彙を探し当てそれが表示されている電子辞書のスクリーンをCとDに見せることによって問題が修復された。そうして英語でのディスカッションという相互行為の本筋に挿入されていた語彙探索連鎖が終了した。表面的にはこの語彙探索連鎖は自己開始他者修復連鎖として捉えられるが、注目すべきは修復を求められたBの振舞いである。彼女は自身の電子辞書スクリーンに問題を修復する語彙が表示されたことをCとDよりも先に知り(138)、その内容を優先的にCとDに伝える権利を有していたにも関わらず、それを自身の口から伝えるのではなく、その語彙が表示されている電子辞書のスクリーンをCとDに

見せている。その振舞いは何を成しているのだろうか。

前節で述べた通り、相互行為上の問題の自己修復は他者修復よりも社会的に選好される。尋ねられたとはいえ、同じ英語レベルとして授業に参加ししかも英語授業外でも顔を合わせる機会の多い知人同士でもある参加者間で、他者の語彙産出問題を修復することはその参加者間に「より知識のあるもの(提供者・確認者)」と「より知識のないもの(被提供者と被確認者)」という非対称な知識状態、知的序列を談話的に構築することとなる。しかし、尋ねられた側が電子辞書を使って問題の修復に当たるということは、尋ねられた側も知識のない状態であるということを示すこととなり、参加者間での知識状態不均衡という状態の構築を妨げることができる。しかしそれでも、電子辞書で調べた側が分かった語を教えるということがあれば、形式的には「教える—教えられる」という知識の受け渡しからくる知的序列が少なからず創られることとなる。これらを鑑みて、Bの行った電子辞書のスクリーンを見せるという振舞いは、自分を「知識を持つ者・教える者」とするのではなく、電子辞書を「知識を持つ者」として構築し電子辞書に問題の修復を委ねていると言える。Bの行ったことは問題を抱えるDの代行者として知識を持つ者である電子辞書に"inaka"(いなか/田舎)とキーを打ち込むことで修復を尋ね、その打ち込んだことへの返答としての電子辞書から修復の提案をスクリーンの共有を通して、自分もDそしてCと同じく修復を受ける側であるとするのであり、そうすることで非対称な知識状態及び知的序列をDとCと自身との間に作らないようにするという、修復にまつわる対人関係維持という規範を志向した振舞いである。問題となる語彙のみをスクリーンに表すことが出来るという電子辞書の一つの特徴を活かすことで、対人関係を不均衡なものではなく均衡なものとして維持しながら授業での英会話タスクを達成するという相互行為方法をここでBは披露しているのである。

5. おわりに

語彙探索連鎖において問題源を抱えた話し手から修復を尋ねられた際に聞き手が行う対人関係を維持する一つの方法としての電子辞書使用、即ち電子辞書自体を「知識のある者」及び「修復の提供者」として捉え扱うことは、これまでの研究では明らかにされなかった外国語(英語)学習者による電子辞書使用法である。英語授業での英語ディスカッションというタスクであっても、参加者達は他の相互行為と同様にお互いに良好な対人関係を築き維持するという規範に志向しており、それを成すための道具として電子辞書が果たす役割は決して小さいものではない。

一般に日本人外国語学習者は、間違いを犯すことを避ける、自分が目立つことを避ける、人より上に立ちたがらない、といったコミュニケーションへの抵抗を示すとされ、それが外国語学習の障害となっていると言われることがあるが、それは学習者が他の学習者との良好な対人関係の維持が知識状態非対称の発現などにより危険にさらされることを避けようとしているためということも一つの要因として挙げられるのではないだろうか。電子辞書という人工物を他者として扱うことで良好な対人関係が維持できるのであれば、今回のような英会話タスクを通じた学習者の外国語学習により良い影響を与えることが出来ると言えるだろう。グループ内で一人でも電子辞書を持っている学習者がいた場合には今回のような使用法を実践することが可能である。電子辞書ではなくとも例えばスクリーンの大きいタブレット端末において外国語辞書アプリケーションを代用することで同様の使用が可能だろう。英会話タスクを授業内で行う際に、語彙産出にまつわる問題があれば積極的に電子辞書を使用すること、そして電子辞書のスクリーンを共有すること(見せ合うこと)を学習者に勧めることは学習効果を高める観点から重要である。

また今回分析したデータでは学生が横一列に並んでいたため、語彙探索連鎖に参加している学習者間での電子辞書スクリーンの共有がより促進された面もあると言える。教室には様々な形態のものがあるが、可動式の机と椅子がある教室であっても固定式の机と椅子のみが設置されている教室であっても、本稿で見た学生達のように横一列に学習者が並ぶことは可能であり、そのことがもたらす学習効果があることを知っておくことは、教室環境による学習デザイン面から重要だろう。今後、より多様な教室環境での学生・生徒の電子辞書使用が詳細に記述・説明され、より良い外国語学習及び教育の実践が成されていくことが望まれる。

参考文献

- Barrow, J. (2010). Electronic dictionary look-up practices of novice English learners. In T. Greer (Ed.), *Observing talk: Conversation analytic studies into second language interaction* (pp. 39–54). Tokyo: JALT Pragmatics SIG.
- Beach, W. A. (1993). Transitional regularities for 'casual' "okay" usages. *Journal of Pragmatics*, 19(4), 325–352.
- Hauser, E. (2014). Embodied uses of electronic bilingual dictionaries. *JALT Journal*, 36(1), 5–23.
- Heritage, J. (1984). A change of state token and aspects of its sequential placement. In J. M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of social action* (pp. 299–345). Cambridge: Cambridge University Press.
- Heritage, J. (2008). Conversation analysis as social theory. In B. Turner (Ed.), *The new Blackwell companion to social theory* (pp. 300–320). Oxford: Blackwell.
- Heritage, J. (2012a). Epistemics in action: Action formation and territories of knowledge. *Research on Language and Social Interaction*, 45(1), 1–29.
- Heritage, J. (2012b). The epistemic engine: Sequence organization and territories of knowledge. *Research on Language and Social Interaction*, 45(1), 30–52.
- Ikeda, K. (2007). The change-of-state token a in Japanese language proficiency interviews. *Proceedings of the 6th Annual JALT Pan-SIG Conference*, 56–64.
- JBMIA. (2013). 電子辞書の年別出荷実績推移. Retrieved from <http://mobile.jbmia.or.jp/market/densi-jisyo-1996-2012%2820130425%29.pdf>, 2015年2月13日取得.
- Kobayashi, C. (2007). Comparing electronic and printed dictionaries: Their effects on lexical processing strategy use, word retention, and reading comprehension. In K. Bradford-Watts (Ed.), *JALT2006 Conference Proceedings* (pp. 657–671). Tokyo: JALT.
- Kobayashi, C. (2008). The use of pocket electronic and printed dictionaries: A mixed-method study. In B. Watts, T. Muller, & M. Swanson (Eds.), *JALT2007 Conference Proceedings* (pp. 769–783). Tokyo: JALT.
- Koyama, T., & Takeuchi, O. (2004). Comparing electronic and printed dictionaries: How the difference affected EFL learning. *JACET Bulletin*, 38, 33–46.
- Schegloff, E. A., Jefferson, G., & Sacks, H. (1977). The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language*, 53(2), 361–382.
- Seedhouse, P. (2005). Conversation analysis as a research methodology. In K. Richards & P. Seedhouse

(Eds.), *Applying conversation analysis* (pp. 251–266). Basingstoke: Palgrave Macmillan.

附録(文字化記号一覧)

(n.n)	()内の秒数分だけの音声のない状態	↑	直後の発話部分の顕著な音調の上昇
(.)	短い(0.19秒以下の)音声のない状態	↓	直後の発話部分の顕著な音調の下降
=	途切れなく密着した発話	h	呼気音(hの数だけ呼気音が続く)
[発話の重なるの開始	.h	吸気音(hの数だけ吸気音が続く)
(word)	不明瞭な発話	wo(h)rd	発話部分の呼気を伴う産出
(())	参加者のジェスチャーなどの記述	<u>under</u>	発話の強調
/(())	/の直前の発話又は沈黙の間に行われたジェスチャーなどの記述	><	周辺よりも速い発話
-	言葉が不完全で途切れた状態	<>	周辺よりも遅い発話
:	直前の音の引き伸ばし	fwordf	笑い声で産出されている発話
?	直前の発話の終了部分の音調の上昇	°word°	ささやき声で産出されている発話
.	直前の発話の終了部分の音調の下降	WORD	周辺よりも大きな声の発話
,	直前の発話終了部分の音調の半上昇		